

賦に難解な字が多いのはなぜか

—前漢における賦の讀まれた—

はじめに

「漢賦・唐詩・宋詞・元曲」と稱されるように、漢代を代表する文學ジャンルが賦であることは、諸家の公認するところであろう。しかし今日のわれわれからすると、賦は他のジャンルに比べてはるかにとつきにくいものであり、その原因は必ずしも時代の古さだけに歸せられるわけではあるまい。試みに、漢賦の代表作とされる司馬相如の「上林賦」をひもといてみれば、上林苑のさまを描寫して次のようにいう。

汨乎混流、順阿而下、赴隘陋之口、觸穹石激堆埼、沸乎暴怒。洶涌彭湃、湔弗宓汨、偃側泌櫛、橫流逆折、轉騰激洌、滂漉沆漑、穹隆雲橈、宛潭膠鬣、險波趨洄、泄泄下瀨、批巖衝擁、奔揚潯沛、臨坻注壑、瀟瀟實墜。(汨乎として混流し、阿に順つて下り、隘陋の口に赴いて、穹いなる石に觸れ堆埼に激かり、沸乎として暴かに怒る。洶涌とし彭湃とし、湔弗とし泌汨とし、偃側とし泌漉とし、横に流れ逆に折れ、轉り騰り激洌とし、滂漉とし沆漑とし、穹隆とし雲橈し、宛潭とし膠鬣し、險ゆる波は洄に趨ぎ、泄泄として瀨に下り、巖を批ちて擁を衝き、奔り揚り潯沛

釜谷武志

し、坻に臨んで壑に注ぎ、瀟瀟として貫ち墜つ。) 上林苑を流れる川の様子を描いた部分であるが、普段見なれない文字が頻出して、注釋に附された反切がなければどのように發音するかさえおぼつかないというのが、率直な感想であろう。ただ、さういふ偏の字が多いから、何やら水と關係がありそうなのは、推測がつくけれども、流れゆく水のさまを形容した「洶涌彭湃」以下の表現は、「洶涌」「湔弗」「泌汨」「偃側」「泌漉」といった疊韻の語、「彭湃」「滂漉」「沆漑」「瀟瀟」のような雙聲の語、そして「泄泄」をはじめとする疊字が大部分を占めている。賦のもつなじみにくさは、こうした難解な文字の使用と、雙聲や疊韻に代表される連綿字の多用に起因すると考えられる。

しかしかりそめにも賦は、漢を代表する文學ジャンルであったわけでも、ここに用いられている難解な文字も、作品が創作されて讀まれた當初は、たとえそれが皇帝を中心とする宮廷だけを主要な創作と受容の場に限っていたにせよ、その與える違和感は、今日のわれわれに對してよりもはるかに少なかったはずである。いや、少ないどころか、賦を讀んで時の皇帝は大いに悦んだのであるから、何の抵抗もなくすんなりと受け入れられていたことになる。今日では難解な文字が、當

時はしごく平易な表現であつたのだろうか。本稿では、難解な文字や連綿字の多用が何に由來するのかを考察しつつ、前漢における賦の創作と享受の形態をさぐってみたい。

一 司馬相如における賦の創作・享受

前漢にあつて賦がどのように制作され享受されたかについて、具體的な形態を明確に記したものは残念ながら見あたらない。断片的な記述をもとにして状況を復元するしかない。

まず右に引いた司馬相如「上林賦」が作られる経過を、『史記』の本傳からうかがってみよう。よく知られているように『文選』所收の「上林賦」は、「子虚賦」とひとまとまりになつて、『史記』では「天子游獵賦」と題されているから、「子虚賦」制作のいきさつを含めて考えてみる。

會景帝不好辭賦。是時梁孝王來朝、從游說之士齊人鄒陽・淮陰枚乘・吳莊忌夫子之徒。相如見而說之、因病免、客游梁。梁孝王令與諸生同舍。相如得與諸生游士居、數歲、乃著子虚之賦。會梁孝王卒、相如歸、而家貧、無以自業。(會たま景帝は辭賦を好まず。是の時梁の孝王來朝し、游說の士齊人の鄒陽・淮陰の枚乘・吳の莊忌夫子の徒を従う。相如見て之れを説び、因りて病もて免ぜられ、梁に客游す。梁の孝王は諸生と舍を同じくせしむ。相如は諸生・游士と居るを得、數歲にして、乃ち子虚の賦を著す。會たま梁の孝王卒し、相如は歸るも、家貧にして、以て自ら業とする無し。)

もともと仕えていた景帝が賦を好まなかつたので、病氣と稱してを辭職した司馬相如は、多くの文人論客をかかえていた梁の孝王の

もとに身を寄せ、そこで「子虚賦」を書き上げたのである。そして庇護者の死と同時に、郷里の蜀へ歸る。

司馬相如が再び都に行くのは、すでに武帝の世においてであるが、彼が武帝に見いだされる過程を、『史記』は次のように記す。

蜀人楊得意爲狗監、侍上。上讀子虚賦而善之、曰「朕獨不得與此人同時哉」。得意曰「臣邑人司馬相如自言爲此賦」。上驚、乃召問相如。(蜀人の楊得意は狗監と爲り、上に侍す。上は子虚賦を讀んで之れを善しとして、曰く「朕は獨り此の人と時を同じくするを得ざる哉」と。得意曰く「臣の邑人司馬相如は自ら此の賦を爲ると言えり」と。上驚いて、乃ち相如を召して問う。)

「子虚賦」を讀んだ武帝が、その作者をおそらく過去の人であろうと考へたのに對して、獵犬の管理に携わっていた楊得意が、同郷人の司馬相如が作者であることを明らかにする。そこで驚いた武帝が、相如を都に呼び寄せるのである。とすれば、相如が「子虚賦」を制作してから武帝が讀むまでには、時間的な隔たりがあり、武帝が讀んだのは、相如が自ら書いたもの、あるいは誰か別の人が筆寫したものである。この當時紙はまだ發明されていなかったから、帛書か木簡・竹簡のかたちで讀んだにちがいない。そのことは、賦が實際に書かれる場合とも、共通するところがある。『史記』の同傳は、右に引き續いて「上林賦」が作られる様子を説明する。

相如曰「有是。然此乃諸侯之事、未足觀也。請爲天子游獵賦、賦成奏之」。上許、令尙書給筆札。……奏之天子、天子大說。(相如曰く「是れ有り。然れども此れ乃ち諸侯の事にして、未だ觀るに足らざる也。天子游獵賦を爲らんことを請う、賦成れば之れを奏せん」と。上許し、尙書をして筆札を給せしむ。……之れを天

子に奏す。天子大いに説ぶ。

武帝が讀んだ「子虛賦」は諸侯のことを書いた作品であるから、天子のために「天子游獵賦」を作りた、と申し出た司馬相如に、武帝は尙書つまり側近の文書擔當係に命じて筆と木簡を與えさせた。おそらく相如はその木簡に自ら賦を書きつけて、武帝に献上したのである。献上する際の形態が、木簡のままかそれとも帛書に淨書してからのかは、判然としないが、武帝はそれをどのようにして讀んだのだろうか。自分でそれを見て讀んだのか、側近の者に命じて讀ませたのか。

ここで思いあわされるのは、秦の始皇帝の公務の執り方である。侯生と盧生が始皇帝の仕事中毒ぶりを評して「天下の事、小大と無く皆な上より決せらる。上は衡石を以て書を量るに至り、日夜呈有り、呈に中たらざれば、休息するを得ず」(『史記』秦始皇本紀)と、言っている。「集解」に「石は百二十斤なり」、「正義」に「衡は、秤衡也。言うところは、表牋奏請、一石を秤り取りて、日夜程期有り、満たざれば休息せざるなり」と注するのにはがえば、どうやら毎日毎晩仕事ノルマを課して、目を通す文書の量は一石つまり約三十キログラム弱に相當していた。その分の仕事を終えない限り、休息をとらなかつたのである。ところでこの約三十キログラムの文書は、もちろん竹簡・木簡の類であつて、まさにそれゆゑにこれほどの重さになるのであるが、始皇帝はこれらの文書をどのようにして閲讀したのか。

皇帝みずから重い木簡の類を繰りながら、讀みすすんだのだろうか。前漢同様、秦代からすでに尙書なる官があつて、皇帝の側で文書の發行を取り扱っていたのだから、文書を讀み上げて皇帝に聞かせる者がいてもおかしくないはずである。少なくとも、かさばる木簡を運

んだり、今日でいへばページを繰ったりする作業に専ら携わる者の存在は、不可缺であろう。右に引いた『史記』秦始皇本紀の「天下之事、無小大皆決於上」は、始皇帝自らが決裁に當つたことを述べるのであつて、後世のたとへば清の雍正帝のように手づから筆を執つて、文書に指示やコメントを書きこむ場面まで、想定する必要はあるまい。詔書でも御璽を押すだけであろうから(それも皇帝が自ら押したとは限らない)、日常の決裁は口頭で指示を下して、書記官に書きとらせたのであろう。文書を讀むのも、側近に讀ませて、それを聞いたとしても、皇帝の行動は廣義の「讀む」の範疇にはいるにちがいない。

むろんこれは公務であつて、漢の武帝が娛樂として賦を讀むのとは同列に論じられないかもしれない。しかし、娛樂であればなおさらのこと、側近に讀ませて自分はそれを聞いて楽しんでた可能性が大である。ましてや賦は韻文である。押韻した詩文は、聲に出して讀まないとあまり用をなさない。とすれば、司馬相如が梁の孝王のもとで作つた「子虛賦」を後に武帝が「讀んで」、さらに筆と札を下賜された相如が書いた「天子游獵賦」を武帝が讀んだのも、實は側近が聲に出して朗讀するのを、聞いていたかもしれないのである。念のために言へば、わたしは武帝自身が作品を目でも讀んだ可能性を、否定するわけではない。水の流れを形容するのにさんずいの字を連ねるのは、明らかに視覚に訴える美的要素を重視するからである。當然、目で見ることもあつたと考へている。しかしながら、さんずいならさんずいという同じ偏を連ねた、いわゆる連綿字は、その多くが雙聲や疊韻の語であつて、こうした語は聲に出して發音しない限り、全然その機能を發揮できないことも事實である。押韻箇所は默讀しても意味の理解に

支障はきたさないが、雙聲や疊韻の語は耳で聞かないと、その存在意義がなくなるのである。前漢の賦とりわけ司馬相如の賦に、雙聲や疊韻の語が多用されていて、それが賦の特徴のひとつになっている以上、賦が聲に出して讀まれていたことはまちがいない。武帝自らが聲に出していたにせよ、側近に讀ませて聞いていたにせよ。

作者の司馬相如が自作の賦を自ら聲に出して、皇帝の前で讀んでいた可能性はあるのだろうか。「相如は口吃なるも書を著すを善くす」(『史記』本傳)とあるように、司馬相如は吃音であった。そんな相如が武帝の前で自作を讀むことができたのか。また「其の進んで宣に仕ふるや、未だ嘗て公卿國家の事に與かるを肯ぜず、病と稱して閑居し、官爵を慕わず」(同)であったから、辯舌たくみに議論を展開したようには見えない。ただ相如は西南夷の制壓について武帝の下問を受けてそれに答えているし、使者として蜀に赴いて外交の任を全うしているから、吃音といえども大きな支障にはならず、そのことから自作を朗讀できなかったと斷言することはできない。同じく本傳から、作品の制作状況をうかがわせる記述を一、二引いてみよう。

「上疏諫獵」(『文選』卷三十九)が作られるのは、「常て上に從いて長楊に至り獵す。是の時、天子方に好んで自ら熊羆を撃ち、野獸を馳逐す。相如は疏を上つて之れを諫む」によつてである。これは長楊宮での武帝の狩獵に同行して、天子たる者が身の危険も顧みずに自ら狩りに興じるのを諫めたもので、散文體である。狩獵に出かけてその場の上疏したのか、天子の狩りの供をした經驗をもとに、後で書き上げたのかは分からない。

「哀秦二世賦」は、その歸途「還るに宜春宮に遇りて、相如は賦を奏して以て二世の行いの失を哀れ」んだものである。この賦は百五十

賦に難解な字が多いのはなぜか

字餘りからなる比較的短い作品で、隔句末の押韻しない部分に「兮」を用いている。後でも述べるが、司馬相如は「上林賦」「子虛賦」を作るのに「幾んど百日にして後成る」(『西京雜記』卷二)であつたといわれるように、遲筆で知られていたし、「臣嘗て『大人賦』を爲るも、未だ就らず。具えて之れを奏せんことを請う。……乃ち遂に『大人賦』を就す」(『史記』本傳)のごとく、書きかけの作品に推敲を重ねて完成させる作家であつた。しかしこの「哀秦二世賦」は短篇であるし、宜春宮は秦の二世皇帝が自殺させられた場所、陵墓もそこにあつたから、一行が立ち寄つた際になれば即興的に作つて、そこで讀まれたと考える方が合理的であろう。

相如が後に病氣になつて職を辭し、茂陵に住んでいた時、武帝は「司馬相如の病甚し。往きて從りて悉く其の書を取る可し。若し然らざれば、後之れを失せん」と言つて、所忠を使者としてやつたところ、相如はもう死んでいて家に彼の著作は無かつた。妻の答えでは「長卿は固より未だ嘗て書有らざる也。時時書を著すも、人又た取り去れば、即ち空しく居る。……」であつて、もともと司馬相如は自分の作品を保存していなかつたという。彼の作品の評判が高くて、需要が大であつたから、人々が持ち去ってしまったのだが、書かれた木簡が持ち去られたからには、口傳えによつて廣まる以外に、それを讀む人の視覚に訴える一面が、當時の作品にすであつたことを示している。

二 そのほかの前漢の賦

司馬相如以外の作家たちは、賦をどのようにして作つたのか。これも武帝期の文人であるが、枚臬に關する記述が『漢書』本傳にある。父の枚乘と別れた彼は、その後逃げて長安に行く。

赦に會い、北闕に上書して、自ら枚乘の子なりと陳ぶ。上之れを得て大いに喜び、召し入れて見え待詔せしむ。泉因りて殿中に賦す。詔して平樂館を賦せしめ、之れを善す。拜して郎と爲り、匈奴に使用す。泉は經術に通ぜず、歌笑すること俳倡に類し、賦頌を爲り、嬖戯を好む。故を以て嬖黷もて貴幸せらるるを得、東方朔・郭舍人等に比せらるるも、嚴助等の尊官を得るに比せらるるを得ず。

右の引用で注目されるのは、枚臬が宮殿で賦したこと、賦の作者であるのみならず俳倡の性格が強かったことである。枚臬が天子の命を受けて、上林苑中の平樂館という建物をテーマにした賦を作るきつかけとなるのは、その前に殿中で賦したことである。これは賦をなけば即興的に作ることであり、彼が天子の側でパフォーマンスを演じる、道化役者の要素をもっていた點を考え併せると、作者自身が天子の前で賦を讀んだとも解釋できる。東方朔や郭舍人になぞらえられたのは、俳優としての一面によつてであろう。嚴助は會稽太守に任ぜられるほど武帝に重用されたが、そのあたりは「其の尤も親幸せらるる者は、東方朔・枚臬・嚴助・吾丘壽王・司馬相如なり。相如は常に疾と稱して事を避く。朔・臬は論を根持せず、上は頗る俳優もて之れを善む。唯だ助と壽王のみは任用せられ、助は最も先に進む」『漢書』嚴助傳)からもうかがえる。枚臬は嚴助のように高い官位を授けられることはなく、東方朔同様、議論家としては失格で、ただ俳優として武帝の側に侍っていたのである。ちなみに嚴助は「詔ありて許せられ、因りて侍中に留まる。奇異有れば、輒ち文を爲らしめ、賦頌數十篇を作るに及ぶ」『漢書』本傳)とあるように賦の作者としても知られ、「嚴助賦三十五篇」(同藝文志)を著録される。また「有奇異、

輒使爲文」は、武帝が何か普段と異なる感懷をもつた時に、側近の文人にそれをテーマにして賦を作らせたことを意味するから、司馬相如は別としても、大部分の賦の創作は即興的な性格が強いと思われる。それは枚臬傳の續く箇所からも知られる。

武帝春秋二十九にして乃ち皇子を得。群臣喜び、故に臬は東方朔と「皇太子生賦」及び「立皇子謀祝」を作る。詔を受けて爲る所は、皆な故事に従わず、皇子を重んずれば也。初め、衛皇后立つ。臬は賦を奏して以て終りを戒む。臬の賦を爲るや朔よりも善き也。

皇太子の誕生や衛夫人の皇后立后など、事あるたびに賦を作つて獻上している。賦の創作において、枚臬が東方朔よりも優っていたとされるのは、たとえば衛皇后立后に際して、皇后としての慎みを最後まで全うすべく賦で戒めたこと、換言すれば、賦の役割とされる諷諫に近い要素をこめた賦を作つたからであろう。枚臬と賦の制作に關する記述はさらに續く。

行に従いて甘泉・雍・河東に至り、東のかた巡狩し、泰山に封し、決せる河を宣房に塞ぎ、三輔の離宮館を遊觀し、山澤に臨み、弋獵・射馭・狗馬・翹鞠・刻鏤、上に感ずる所有れば、輒ち之れを賦せしむ。文を爲ること疾く、詔を受くれば輒ち成り、故に賦する所の者多し。司馬相如は善く文を爲るも遅し、故に作る所は少なきも臬よりも善し。臬は賦辭の中にて自ら賦を爲るは相如に如かずと言ひ、又た賦を爲るも乃ち俳なりと言ひ、視らること倡の如く、自ら倡に類するを悔ゆる也。故に其の賦に東方朔を詆頡する有り、又た自ら詆頡す。其の文は翫戲、曲さに其の事に隨ひ、皆な其の意を得たり。頗る歌笑し、甚だしくは閒靡な

らず。凡そ讀む可き者は百二十篇、其の尤も娯戯にして讀む可からざる者は尙お數十篇あり。

武帝の巡狩につき従つて各地をめぐる、行く先々で天子が心に感ずるところがあれば、そのたびに賦を作つて感懐を代わりに表現した。筆が速い分だけ質は劣つていて、ちょうど司馬相如の對極に位置していたが、それは自分でもよく認識していたようだ。どうやら枚臬の作品はその場かぎりで消えてしまふ程のものであったが、それにしては、たとえ短篇であるとしても、百二十篇もの賦『漢書』藝文志も同じが著録されているから、東方朔の賦よりは上質であつたのだからか。また自らをそしり、東方朔をもそしつたのは、この二人が本質的には同類であつたことを示唆するし、司馬相如にかなわぬことを認めつつも、少なくとも賦の制作において自らを相如と比較している以上、程度の差があるだけで、基本的に司馬相如・枚臬・東方朔らの賦は、同一次元で論じられてよいのだから。そして、枚臬の賦はおふぎけや下世話に過ぎるため、高い評價を得られなかつたけれども、そんな彼の賦が大量に残つていたことは、需要があつたこと、皇帝たちがそれを好んで受け入れていたことを物語っている。

さらに、「上有所感、輒使賦之。爲文疾、受詔輒成」のごとく、武帝が感興をもよおすごとに作らせて、しかもすぐにできあがつたことも注目に値する。これはほとんど即興に近い制作であらう。なぜなら、命を受けてからだいぶ時間が経過してできあがつたのなら、その感興もすでにさめてしまつていて、賦を作らせた意義も失われるから。武帝の意を推し測つて當意即妙に賦に仕上げたこそ、文人枚臬の存在價值がある。即座に賦を作る點は、枚臬がその範疇に入れられてゐる道化役の特質とも共通する。東方朔は打てば響くように返答し、

賦に難解な字が多いのはなぜか

その頓智のひらめきの速さは及ぶ者がなかつた。さればこそ武帝は彼を重用したのである。じっくり長考して妙案を出したところで、時すでに遅ければ興ざめでしかない。とすれば、その賦をどのように献上したのだろうか。まさか、わざわざ木簡に書いて示すことはいらないであらう。機を逸することなく、作者自身が聞き手の武帝に向かつて朗唱する。練りに練つた長篇の賦でさえなければ、それも可能であらう。句末の押韻があるいは面倒かもしれないが、たとえば東方朔が武帝の前で郭舍人とやりとりした謎かけも押韻していることを考えあわせると、さほど困難ではあるまい。賦の押韻箇所は、實際に口に出してはじめて効力を發揮するから、枚臬はできたての賦を朗讀したとわたしは考えている。その後で木簡などに筆寫されて残つたのだから。武帝の死後から十數年降つた、宣帝の時期の文人王褒も賦の作者として知られる。『漢書』王褒傳によると、

上は褒をして張子僑等と並びに待詔せしむ。數しば褒等を從えて放獵す。幸する所の宮館にて、輒ち歌頌を爲らしめ、其の高下を第して、差を以て帛を賜う。

宣帝が王褒らの文人をつき従えて行幸し、先々で歌や頌を作らせたのは、先の武帝が枚臬らをともなつて各地を巡狩し、賦を制作させたのと同じである。ここでは「歌頌」とあるが、周知の通り賦は頌とも稱されたし、これに續く記述で賦について述べているから、歌や賦を作らせたと解釋してよい。歌は讀まれるものではなく、メロディをともなつて歌われるものであるから、賦も宣帝の前で作者もしくは誰かが朗唱して、宣帝に聞かせたのではないか。

歌や賦を作らせてコンクールを開催し、そのできぐあいによって下賜の品に差をつけたため、多くの者が不要不急の賦ごときで競わされる

ことの非を論じた。それに對する宣帝の發言が、當時の辭賦觀を反映したものとして、古來よく引用される。つまり、ファッシュンや音樂よりも辭賦の方がましであると述べ、「尙お仁義風諭、鳥獸草木多聞の觀有り、倡優博奕よりも賢なること遠し」と、辭賦がはるかにすぐれているとする比較の對象は、道化や賭博ぐらゐしいかないことを、端なくも示しているのである。續けて非常に興味深い記述が見られる。

其の後太子は體安からず、忽忽として善く忘るるを苦しみ、樂しまず。詔ありて褒等をして皆な太子の宮に之きて、太子に虞侍せしめ、朝夕に奇文及び自ら造作する所を誦讀せしむ。疾い平復して、乃ち歸る。太子は褒の爲る所の甘泉及び洞簫頌を喜び、後宮の貴人左右をして皆な之れを誦讀せしむ。

宣帝の命を受けて王褒らは、病氣療養中の太子（後の元帝）を東宮に見舞い、太子を樂しませるために、朝夕珍しい文や自分たちの作品を「誦讀」した。こうした作品はあくまで娛樂のためであるが、問題はその作品が讀まれる形態である。療養中の太子が、自分で書物を手にとって讀んだのではあるまい。王褒らが書物を持參して語りきかせたか、あるいは書物は見ずに憶えている作品の文句をそらで朗唱したかであり、おそらく後者の方であろう。したがって、恢復後に太子が氣に入つた王褒の「甘泉頌」や「洞簫頌」を、後宮の女官たちに「誦讀」させたのも、頌を暗唱させたのであつて、決してテキストを見ながら讀ませたのではない。では「誦讀」とは、どういう意味か。

『説文解字』三篇上に「誦は誦也」とあり、『漢書』藝文志の詩の條に「凡そ三百五篇、秦に遭りも全きなる者は、其の誦誦にして、獨り竹帛に在るのみならざるを以ての故也」、つまり『詩經』の詩は口承で伝えられてもいたから、秦の焚書を経てほぼ完全なかたちで生き

延びることができたという、「誦誦」の用例から考えて、「誦」はそらんじることが指すのだろう。「讀」は『説文解字』の同篇に「讀は書を讀する也」とある一方、五篇上では「籀は書を讀する也」と、いわゆる互訓の形式で字義を解いている。「讀」の音は「言に从う、實（イ）の聲」で、「トク」であらうけれども、段玉裁は「讀は籀と疊韻にして互訓なり」と注しているから、「句讀」の「トウ」でもある。さらに段氏は注で、漢の儒學者が經文に注する際に章句を斷つことを「讀」という例、「讀むこと……の如し」のように發音を擬することを指す例、誦誦することを「讀」という例などを擧げて、誦誦はただその字句を憶えて言うだけであるが、讀はそれにとどまらず意味までも理解することであるとす。してみると、誦讀とは暗唱することであり、より詳しくいうと、ここでは王褒の頌の意味を理解した上で、その文句をそらで朗唱することを指す。

こうした解釋がさほど修正を要しないことは、もうひとつの「誦讀」からも確かめられる。その誦讀とは、『漢書』の同じ王褒傳の冒頭に見える語である。

宣帝は時に武帝の故事を修め、六藝の群書を講論し、博く奇異の好みを盡くす。能く楚辭を爲す九江の被公を徵して、召見して誦讀せしむ。

『楚辭』が獨特の語り方によつて、特定の集團の中で繼承されていくことを示す根據として、しばしば言及される箇所である。わざわざ九江から都に招かれた老人が、「誦讀」するのであるから、餘人にはまねることのできない、特徴的な節回しによる朗唱であろう。もちろん、書物を見ながら朗讀するわけがない。

西洋において「一般的情勢は、古代（文學史上の古代は、ふつうアウ

グスティヌスまでとされる)を通じて、著作はまず聞かれ、讀まれるときは音讀だつたことを示している。漢字は表音文字であると同時に表意文字でもあるから、西洋の例と安易に比較するのは慎まねばならないが、特殊な例を除けば、前漢において賦は口頭で語られ、讀まれる際は音讀であつたといえるのではないか。

三 賦の原初形態

前漢に興隆する賦は、それ以前にあつてはどのようなものか。先秦における賦の源流は何か。これは賦の定義とも關つてくるが、賦の特質を最も根底のところできらえたのは、『漢書』藝文志の詩賦略に見える次の表現であろう。

傳に曰く「歌わずして誦する、之れを賦と謂う。高きに登りて能く賦すれば、以て大夫爲る可し」と。……而して賢人失志の賦作れり。大儒孫卿及び楚の屈原は、讒に離りて國を憂え、皆な賦を作り以て風す、威な惻隱古詩の義有り。其の後、宋玉・唐勒、漢興りて、枚乘・司馬相如、下は揚子雲に及び、競いて侈麗闕衍の詞を爲り、其の風諭の義没し。

傳に言うとして引かれる「不歌而誦謂之賦」が、おそらく最も簡潔な賦の定義であろう。詩がメロディにのせて歌われるのに對して、賦はメロディをとまわずに朗唱されるのである。「賦と詩との本來の區別は、賦は誦せられたのに對し、詩は歌われたことであつたと思われる。つまり、賦と詩の區別は、書かれた段階の形式によるのではなく、口頭で發表される形式の違いによるのである」。そして『國語』周語上に「公卿より列士に至るまでをして詩を獻じ、瞽をして曲を獻じ、史をして書を獻じ、師をして箴し、瞍をして賦し、矇をして誦せ

賦に難解な字が多いのはなぜか

しむ」とあり、韋昭の注に「目無きを瞽と曰う。瞽は樂師なり」「眸子無きを瞍と曰う。賦は公卿列士の獻ずる所の詩也」「眸子有るも見ゆる無きを矇と曰う」という。盲目の人が樂曲を獻上し、他に獻上された詩などを、瞳のない人や瞳があつても見えない人が、賦したり誦したりしたことになり、こうした樂曲や詩などは書かれたものを見ながら歌つたり朗唱したのではなく、耳で聞いた内容を口頭で歌い語りしたのである。

詩賦略は、戰國時代に入ってから賢人失志の賦が起つたとして、荀況と屈原を舉例する。屈原の作とされる「離騷」等が、漢代の賦の先蹤的役割を果していることは、今更いうまでもないから、ここでは前者において見られる若干の特徵についてふれるにとどめよう。この荀況の賦が、『荀子』の一篇「賦篇」を指すのか否かは議論があるが、「賢人失志」の内容をもつ『荀子』成相篇も、韻文から成つていて、この篇には、三言・三言・七言の句型がまま存在する。この形式は漢代の謠諺や樂府にもよく見られ、朗唱しやすいことを考慮に入ると、成相篇じたいが朗唱されて傳つていたことは疑いえない。あるいはメロディをとまなつて歌われていたのかもしれない。また賦篇は、禮・智・雲・蠶等を答えとする一種の謎とき問答體である。篇幅の差こそあれ、押韻した謎とき問答といえは、先に擧げた東方朔のそれを想起させる。戰國の諸侯と遊説家の間で、こういったやりとりがあつたとしてもおかしくはない。

漢代の賦の淵源のひとつとして指摘されるのが、戰國の諸子、とりわけ縱橫家である。縱橫家のひとり蘇秦の遊説を、『戰國策』秦策一から見てみよう。「蘇秦は始めて將に連横せんとし、秦の惠王に説」こうとするが、秦王は婉曲に斷わろうとする。そこで蘇秦は古來戰爭

は絶えることが無かったと言ひ、次のように續ける。

古者使車轂擊馳、言語相結、天下爲一。約從連橫、兵革不藏。文士並饒、諸侯亂惑。萬端俱起、不可勝理。科條既備、民多僞態。書策稠濁、百姓不足。上下相愁、民無所聊。明言章理、兵甲愈起。辯言偉服、戰攻不息。繁稱文辭、天下不治。舌弊耳聾、不見成功。行義約信、天下不親。

さらに蘇秦の言葉は續くけれども、實は右の一段は毎句押韻しているのである。この韻を踏んだ辯舌が押韻していない箇所と違和感なくつながっていて、それが諸侯の前で話されたことは、韻文部分が大半を占める前漢の賦が、王や皇帝たちを前にして話されたであろう様子を想像させる。押韻した表現を遊説家が語ったことは、前漢までの賦の作者が遊説家的性格をもっていたことと對應する。屈原は「辭令」に馴れていて、「出でては則ち賓客に接遇し、諸侯に應對す。王甚だ之れに任す」(『史記』本傳)であったし、陸賈は「名づけて口辯有るの士と爲し、左右に居り、常に諸侯に使用す」(『史記』本傳)であり、嚴助は東甌救援のために勅使として會稽に派遣されている。外交面での辭令が、口頭で語られる賦の特質と切り離せられない證據である。吃音であったとされる司馬相如でさえ、使者として何度か蜀へ赴いているのではないか。

谷口洋氏の『淮南子』の文辭について⁽¹⁾は、『淮南子』の中に漢の賦と關連する表現が見られることを指摘した興味深い論文で、『淮南子』に、無韻の『莊子』をとりこんで有韻化し、文藝化の方向に進む部分があると述べておられる。そのことは同時に、淮南の宮廷において多くの論客たちが、論じ語り合っていたものが、『淮南子』という書物に編纂されていったという過程を、物語っているのではないか。

だとすれば、すべてを述べつくそうとする、賦と共通する鋪陳の技法がみられることも、『弦歌する』ようにメロディに變化を與えることのない『かたり』口が、讀むには退屈なこのような(「目録を並べたよ」な、引用者注)箇所において、同じようなことをたたみ重ねることによって、聽者にくり返しの美感を強く與えた⁽²⁾であろう點から説明できるのである。

前漢の賦の作者たちが、多くは皇帝の側にいってもっぱら口頭言語によつて活躍していたことは、班固「兩都賦」序(『文選』卷一)からも明らかである。

故に言語侍從の臣、司馬相如・虞丘壽王・東方朔・枚臯・王褒・劉向の屬の若きは、朝夕に論思し、日月に獻納す。而して公卿大臣、御史大夫の倪寬・太常の孔臧・太中大夫の董仲舒・宗正の劉德・太子太傅の蕭望之等は、時時間⁽³⁾を作る。……故に孝成の世に、論じて之れを録すれば、蓋し奏御する者、千有餘篇あり。

成帝(前三一―前七)期の調査記録によると、皇帝に奏上された賦が一千篇以上もあったというほどの、盛況を呈した賦の制作者として、司馬相如に代表される言語侍從の臣、倪寬をはじめとする公卿大臣が、それぞれ擧がっている。後者のグループにおいて、作者名が箇簡の官名とともに列擧されているのに比して、前者では官名は伴わずに言語侍從の臣とまとめられている。しかも後者では折にふれて作られる程度であるが、前者では毎日毎月獻上されたという。常時皇帝の側に侍つて賦を制作することが、彼らの主要な任務のひとつであったと言つても過言ではない。

ここでひとくくりにされている言語侍從の臣の「言語」とは、いかなる意味か。『論語』先進篇に見える「德行には、顔淵・閔子騫・冉

伯牛・仲弓、言語には宰我・子貢、政事には冉有・季路、文學には子游・子夏」の言語の謂いであろう。「言語」とは、辯舌を意味し、皇侃の「義疏」に引く晉の范甯の説には、「賓と主と相い對するの辭を謂うなり」、つまり殊に外交交渉の際の辯舌であるとする。司馬相如以下の文人たちは、その辯舌によって皇帝に仕えていたのであり、しかも彼らは例外なく前漢を代表する賦の作者である。この頃の賦が、側近たちによって口頭で朗唱され、あるいは作者自ら音讀するかたちで献上していたことは、ほぼ確かだろう。

辯舌で仕えていた者の中に、東方朔や枚皋の名が見えることにも注意すべきである。枚皋が賦を制作しても俳優と同列に扱われていたこと、本人がそれを残念に思っていたことは既に述べた。東方朔が俳優の範疇に入るとは言をまたない。こうした道化役と賦との關係は、さらに遡ることができる。「史記」滑稽列傳中の優孟や優旃がそうである。「優孟は、故と楚の樂人也。長八尺、多辯にして、常に談笑を以て諷諫す。……其の後二百餘年、秦に優旃有り。優旃なる者は、秦の倡俳儒也。善く笑言を爲すも、然れども大道に合す」。背丈が八尺もあるとか、俳儒であるとかの身體的特徴は、道化役に格好の條件であるが、そうした道化の優孟が、多辯で談笑によって諷諫したのは、東方朔や枚皋と同じである。また優旃も談笑に巧みであったが、面白おかしいだけでなく、「大道」にかなっていたとされる。この行爲こそ、實は、諷諫にはかならない。後に「勸百諷一」であるとして賦の弊害が指摘されるようになり、賦にそうした諷諫の效用を求めるのは、儒學的な觀點からであるといわれる。確かにそうであるけれど、戰國期の俳優たちが、諷諫を意識的行なっていたとすれば、そしてそれが前漢の賦に繼承されているとすれば、賦にはもともと諷諫的性

格を一面にもっていたことになる。

俳優の系譜はさらに遡って、滑稽列傳の卷頭に置かれる淳于髡にも至る。「史記」に載せる彼と齊の威王との問答に、賦との近似性を見いだす向きもあるほどだ。そして彼が、戰國期に齊の臨淄の稷下に集まった、多くの遊説家のひとりであることも見のがせない。前漢の前半における賦の作者は、その「多くがもとの楚の地の出身であるか、もしくはそこで仕官していたから、楚で生まれた賦の形式に習熟していた」。それゆゑ賦にとつて楚という地は大きな意味をもっている。とともに、齊という地も看過できないのではないか。「文心雕龍」時序篇の表現を借りると、戰國時代「唯だ齊・楚の兩國のみは、頗る文學有り。齊は莊衢の第を開き、楚は蘭臺の宮を廣くし、孟軻は館に賓し、荀卿は邑に宰たり。故に稷下は其の清風を扇ぎ、蘭陵は其の茂俗を鬱まにす」であった。時序篇は續けて、その例として騶衍・騶奭・屈原・宋玉の名を挙げ、彼らの「噂い傳はの奇意は、縦横の詭俗より出づるを知る也」と結ぶ。また齊で活躍した孟軻の作『孟子』に常用される表現が、司馬相如の賦に見られることも指摘されている。司馬相如「天子游獵賦」は、全體が子虛・烏有先生・無是公の三人の會話形式から成っていて、この三人はそれぞれ楚、齊そして漢王朝の立場を代辯している。無是公は別にしても、あとの二人がなぜ楚と齊なのか。楚の雲夢や齊の海濱など、狩獵にふさわしい場所がそれぞれにあったことも理由にあげられようが、右の考察をふまれば、戰國期以來の遊説家が活動した地として楚と齊があり、それが枠組みとなって子虚と烏有先生に結實したと想像することもできるのである。

四 『漢書』と『史記』・『文選』

司馬相如「天子游獵賦」は、『史記』『漢書』『文選』に載録されている(ただし『文選』は「子虛賦」「上林賦」に分かつ)が、この三種のテキストを讀みくらべてみると、文字の異同に關してある特徴が存することに氣附く。たとえば冒頭部分で楚の使者である子虛を迎えて、齊王が一緒に狩りに出る所を、『史記』『漢書』は「出田」に作り、『文選』は、「出敗」に作る。顔師古が「田は獵也」と注する通りで、「敗」の方が意味は理解しやすい。續く海濱近くまでの狩獵で、網が山の端までつらなる情景を『史記』『漢書』は「采罔彌山」とし、『文選』は「采網彌山」とする。これも「網」の方が讀みやすい。また雲夢の山のそびえる様子を、『史記』は「崑崙」、『漢書』は「崑崙」、『文選』は「崑崙」に作る。蓮の花を『史記』『文選』は「芙蓉」、『漢書』は「芙蓉」に、『文選』は「芙蓉」に、『漢書』は「芙蓉」に作る。概していえば、『文選』が比較的讀みやすく、『漢書』が最も理解しにくい。

もちろん逆の例もあるが、總じて『文選』は、山かんむり、さんずい(水)など漢字の偏が整然としているのに對し、『漢書』のは形聲字の旁だけというように色分けされる。では、なぜこうした違いが生じているのか。書が成った時代は『史記』『漢書』『文選』の順であるが、今日目睹しうるテキストが當時の姿をそのまま傳えているはずはない。元の作品に近い時期に著された『史記』に限っても、傳寫の過程において錯誤が増加する一方であり、いくら嚴正な校訂を経ても本來の面目は窺いがたい。『文選』所收の作品などは、採録されるまでにすでに元の形を失っている可能性すらある。最も讀みやすいのが、

元の面貌に近いとは、決していえないのである。ところで『漢書』司馬相如傳には、唐の顔師古の次のようなコメントが附せられている。

近代の相如の賦を讀む者は多し。皆な文字を改易し、競って音説を爲し、本眞を失うを致す。徐廣・鄒誕生・諸詮之・陳武の屬、是れ也。今班書の舊文に依りて正と爲し、彼の數家に於ては、並びに焉れを取る無し。

司馬相如の賦の讀者が、勝手に文字を改めて、漢字の發音についての説をわれ先に立てていたことが知られる。「改易文字、競爲音説」が主に、賦に特徴的な、形聲字を連ねたいわゆる連綿の語を指していることは、容易に想像できる。ここに名の擧がっている四人のうち、たとえば徐廣は六朝宋の人で、『隋書』經籍志に、その著『史記音義』が著録されており、顔師古の言及と符合する。

『漢書』をできうるかぎり本來の面目にかえて讀もうとするのが顔師古の基本的態度であること、したがって『史記』や『文選』によって書きあらためられたテキストが『流俗書本』としてしりぞけられたことは、確かである。現行本『漢書』と『文選』との違いは、司馬相如の賦のみならず、揚雄の「甘泉賦」にも當然見いだされる。『漢書』の「大夏」「崑崙」が『文選』で「大夏」「崑崙」となっているように。

顔師古の判断と措置が適切であることは、出土資料によっても確認できる。前漢時代前半の竹簡に「田」や「罔」の記載例があり、それぞれが「敗」と「網」の意であることは、既に引用した『漢書』の「天子游獵賦」と、軌を一にする。そして漢代は形聲字が増加する過程にあったのだ。「形聲字の偏旁の範圍と字形の構成様式は、漢代からすでにすっかり備わっていて、漢代以降形聲字は日増しに多くなっ

た。『文選』所收のテキストに偏の整った形聲字が多いのは、こうした漢字の増加を反映しているのであり、それと同時に文學作品に視覺的要素を要求する度合いが強まったことを示している。漢代にあってもちろん漢字の視覺的要素に充分留意されていた。『漢書』所收の司馬相如の賦にも、明らかに同じ偏を連ねた雙聲や疊韻の語が少なからず見られる。しかし形聲字が増加してから、同一の發音で偏の異なる字を、引伸された意味の違いにもとづいて書き分けるようになるのは、意味の辨別を容易にするとともに、視覺面に訴える効果をもねらっているからであろう。文學作品中の同じ偏の字の連續は、確かに美的効果をもたらす。

「上林賦」の「流離」「消搖」「膠葛」といった語は、雙聲や疊韻であり、「消搖」などは後に「逍遙」と表記される語である。これらはここではオノマトペの役割を擔っていて、假借的用法で使用されている。極論すれば、單なる發音記號にすぎないのである。司馬相如の賦では、見る要素にも關心が拂われつつあるものの、重點はやはり耳で聞く方であったのだ。そびえ立つ山の險しさ、流れる水のすがたを形容するばかりか、草木鳥獸といった物の名稱にまでも、雙聲疊韻の語を用いているのは、賦を讀む者、いや聞く者にとって、生き生きとした臨場感を覺えるという快感があり、それが司馬相如の賦の大きな魅力になっっているのだから。

ところで司馬相如の著書には『凡將篇』があつて、『漢書』藝文志に著録されている。六藝略の小學に分類されるから、一種の字書である。今日その斷片が數條輯められており、たとえば『藝文類聚』卷四十四に引かれるのは、「鍾磬笙筑吹竽」で、樂器の名稱をままとめていてしかも同一の部首の字を集めている。このことは、彼の賦に物の

賦に難解な字が多いのはなぜか

名稱が大量に使用されるのと無關係ではない。同一の部首の字をまとめておくことは、視覺面に注意を拂っていることの證左であるのだが、聽覺面においても大きな意味をもっているといえる。なぜなら、他の書物に引かれる斷片を併せ考えてみると、いずれも七字句であること、末尾で押韻していると思われることから、これはあくまで暗記用のテキストだからである。七言は民間の謠諺にまみ見られて憶えやすい形式であり、韻を踏むのも同じ效用がある。

また藝文志では『凡將篇』は前後を、『蒼頡篇』と『急就篇』にはさまれている。『蒼頡篇』の殘簡から推測すると、この書は「だいたひ四字の句をつらね、一句おきに脚韻をふんだ韻文を成していた」。これは「學童に文字を教える本、つまり識字教科書として編まれたゆえに、全部を韻文につづつて暗記しやすくしてあつたのである」。『急就篇』はとくに第七章以下は、「さまざまの物の名をならべた七字句でできていて」、「それらはセンテンスを成した句であつたり、ただ物名をならべるにすぎない句もあるが、必ず句末に韻をふんでいる。そういう點から見れば、この書は暗記用のテキストではあるが、一種の分類語彙だと言つてもよい性格をもつ」。『凡將篇』は『急就篇』とはば同様の書であつたと考えてよからう。

おわりに

以上のように見てくると、前漢において賦は基本的に口頭で語られていたという推測は、ほぼ首肯できるのではないか。もちろん目で讀む要素もあつたわけだが、では、それが強まるのはいつごろからだろうか。ここで詳しく論じる餘裕はないが、わたしは前漢末の揚雄のころを想定している。その理由は次の通りである。

揚雄は同音の連綿字の表記を變えて、意圖的に重複を避けようとしている。たとえば、「河東賦」に「澤滲滲而下降」とあり、「滲滲」は師古注に「滲滲は流るる貌也。……滲の音は淋、滲の音は離」というから、これは雙聲の語である。一方「校獵賦」に「淋離廊落」の表現が見え、『漢書』のテキストがもとの表記をとどめておくとすれば、同音の雙聲の語を片方では「滲滲」と記し、もう片方では「淋離」と書いておけることになる。また古字を多く使用している。たとえば「反離騷」の「騁騁騷以曲躡兮」の躡は師古注に「躡は古えの艱の字なり」といい、『說文解字』によれば籀文の艱の字である。「甘泉賦」中の「造選離宮般以相燭兮」の「選」は顏師古によると「古えの往の字」であつて、これも『說文解字』に従うと、古文の往の字である。もちろん『漢書』所收の司馬相如の賦にも、顏師古が古文であると指摘する字が見られる。しかし揚雄の賦はそれよりも多いし、揚雄はかつて劉歆の子の劉棻に古文の見なれぬ字を教えたことがある。

揚雄も賦は音讀していたにちがいないが、目で見る要素がより大きく加わつたのではないか。彼は成帝の宮廷文人の性格をもつていたが、それよりも學者としての側面が強かつたのは、上に引いた班固「兩都賦」序で「言語侍從の臣」に入つていなかったことを想起すればよからう。また『文心雕龍』事類篇は、賈誼や司馬相如の賦にも典故の使用があるが極めてまれで、これが廣く用いられるようになるのは、揚雄（ただし學例されているのは賦ではないが）や劉歆からであると指摘する。その背景には儒學の浸透があるけれども、連綿字にも限度がある以上、より豊富な内容を賦に盛り込んで表現するために、典據の運用や見なれぬ文字の使用という方向に進んだとも考えられよう。揚雄は後に賦の制作をやめてから、若いころに賦を好んだのを「童子の彫

蟲篆刻」(『法言』吾子篇)にたとえているが、これが文字の音聲面なしに視覺面に關わる比喩であるのも、單なる偶然ではないだろう。以上を要するに、賦とりわけ前漢の賦に雙聲疊韻の語が多く使用されているのは、賦が口頭で讀まれていたことに由來するのであり、目で見ると強まっていけけれど、少なくとも司馬相如や王褒の賦において、重點が聞くことであつたのは疑いえないのである。

注

- (1) この引用は李善注『文選』(胡克家本)によつた。
- (2) たとえば司馬相如が「大人の賦」を獻上すると、武帝は「大いに説び、飄飄として雲を凌ぐの氣有り、天地の間を遊ぶ意に似たり」(『史記』司馬相如傳)であつた。
- (3) 『漢書』百官公卿表によると、尙書は少府の屬官であるから、皇帝の私的な面にかかわる文書係である。また『通典』卷二十一職官四にいう、「秦の時、少府は吏四人を遣りて殿中に在らしめ、發書を主らしむ、之れを尙書と謂う。……漢は秦を承けて置く。武帝の後庭に遊宴するに及んで、始めて宦者を用いて中書を主らしめ、司馬遷を以て之れを爲さしむ」と。
- (4) 先に引いた司馬相如のことには「然此乃諸侯之事、未足觀也」とあつて、「觀」の字があるが、このことから文字通りに、賦を「觀」るものであると解釋するのは妥當ではあるまい。また、『史記』滑稽列傳によると、東方朔が最初に上書した際、「凡そ三千の奏牘を用う。公車は兩人をして共に其の書を持ち上げしめ、儼然として能く之れに勝る。人主は上方從り之れを讀み、止むるときは、輒ち其の處に乙す。之れを讀むに二月もて乃ち盡く」であつたという。そうだとすれば、武帝がみずから木簡を手にして、二か月を費して讀みおえたことになるが、この段は

褚少孫の補筆にかかる部分で、『漢書』東方朔傳も採録していない。おそらく東方朔にまつわる傳説の一つであろう。

- (5) 「子虛賦」「上林賦」が、全體の枠組みとして三人の會話形式をとっており、したがって連綿字はすべて三人のうちの誰かが語ったことばとして使われていることも、聽覺的要素が強いことを示している。賦の源流のひとつに先秦の縱橫家の存在が指摘されるように、「子虛」「烏有先生」「無是公」の三人は、遊説家の趣きを色濃く残している。遊説家は各國の諸侯に對して自説を説いて回ったわけだから、この賦がもつばら武帝を讀者に想定して作られたのだとすれば、遊説家と諸侯の關係は、この三人と武帝との關係に相當する。ならば、側近が自説を説く三人の役回りをして讀んでいるのを、武帝は聞く側に回っていたと想定するほうが、作品の設定がより效果的になるのではないか。なお、司馬相如が梁で制作したものと「子虛賦」が、『文選』所收の「子虛賦」と同一か否かについては、多くの議論があり、にわか結論を下せないが、わたしは、もとの「子虛賦」を活用しながら冒頭に「無是公」を登場させるなどの改作を、司馬相如もしくは別の誰かが施して、現今の「天子游獵賦」の形に統一したと考えている。また指示部分を明確にする便宜上、本文中で子虛賦、天子游獵賦などの名稱を併用した。

- (6) 何焯『義門讀書記』卷十七にも「奏賦戒終、有詩人之則、非徒俳倡嫚戲也。故云善於朔」。

- (7) 「生肉爲膾、乾肉爲脯。著樹爲寄生、盆下爲窰數」や「口無毛」[△]。聲響[△]。尻益高[△]など（『漢書』東方朔傳）。

- (8) 嚴密にいえば、段氏のいう「疊韻」は、讀・縮がともに古音第三部に入っていることだけを導き、縮（チュウ）と近似する韻（トウ）の音から、「句讀」の語義に及ぶのはやや無理があるかもしれない。

- (9) 『太平御覽』卷八百五十九に引く『七略』では、この時「被公は年衰え、母老いて、一たび誦する毎に、軋ち粥を與えらる」状態であった。

賦に難解な字が多いのはなぜか

またやや後の例であるが『三國志』吳書・闕澤傳に闕澤は「家世農夫、至澤好學、居貧無資、常爲人傭書、以供紙筆、所寫既畢、誦讀亦遍」とみえ、他人のために書寫して、寫し終えるころにはほぼ全部を「誦讀」つまり、暗記していたという。

- (10) 柳沼重剛「音讀と默讀」(『西洋古典とぼればなし』、岩波書店、一九五五年、九十一頁)。なお、同書によれば、西洋では九一〇世紀までは、基本的に文字はすべて大文字であり、句讀點も發明されておらず、語と語の分かち書きもしないから、默讀できるわけがないという説を紹介するとともに、M・B・パークス『休止とその効果——西洋における句讀點の歴史序説』(一九九二)の研究では、句讀點が広まったのは、六世紀にアイルランドにおいてであることにも言及する。そこは、ラテン語が語られた言語ではない邊境に位置する。

- (11) 清水茂「語りの文學——賦と敘事詩」(『語りの文學』、筑摩書房、一九八八年、八頁。初出は一九八六年)。なお同論文は、ものの名稱の羅列を含む比較長篇の作品が、視覺障害者を擔い、手として傳えられていた等の點で、賦が古代ギリシャの敘事詩や日本のかたりものとも共通することを、詳細に論證されていて、本稿はここから大いに啓發を受けた。

- (12) たとえば顧實『漢書藝文志講疏』。

- (13) 章學誠『文史通義』詩教、同『校讎通義』漢志詩賦、劉師培『論文雜記』等。

- (14) 前漢の枚乘が吳王濞に奏した書にも押韻部分がある。「係絶於天不可復結、隊入深淵難以復出。其出不出、問不容變。能聽忠臣之言、百舉必脫。必若所欲爲、危於參卵、難於上天。變所欲爲、易於反掌、安於太山」(『漢書』本傳)。また漢初の陸賈『新語』にも押韻部分が見られる。王利器『新語校注』前言(中華書局、一九八六年、六頁)參照。

- (15) 『日本中國學會報』第四十七集、一九九五年。

- (16) 注11論文二十九頁。

- (17) 吉川幸次郎『論語』、全集第四卷、三百二十九頁。
- (18) 萬曼「辭賦起源」(『國文月刊』第五十九期、一九四七年、二十一頁)。
- (19) 略玉明「論『不歌而誦謂之賦』」(『文學遺產』一九八三年第二期、四十頁)。
- (20) 興膳宏「宮廷文人の登場」(『文學』第四十五卷、第十一號、百十頁)。
- (21) 『史記』は瀧川龜太郎『史記會注考證』、『漢書』は王先謙『漢書補注』、『文選』は胡刻本を用いた。
- (22) この他に際だった例としては、つぎのようなものがある。
 『史記』 『漢書』 『文選』
 桂柎 旌柎 旌棧
 廖差 參差 廖差
 沈溶 允溶 沈溶
 荔枝 離支 離支
- (23) 吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」(『六朝精神史研究』、同朋舎出版、一九八四年、三百八十九頁)。なお、同論文には『史記』による『漢書』本文の書きかえの例が、列舉されており、なかに司馬相如「子虛賦」も含まれている。三百六十一頁参照。
- (24) 『銀雀山漢簡釋文』、文物出版社、一九八五年。〇三八四「田(敗)魚(漁)」、〇五八一・一四五〇「岡(網)」。()内は、吳九龍氏による釋文。また二〇九「制四疆(疆)之内」は、いわゆる「上林賦」冒頭に無是公がいう言葉中の「封疆畫界者」に、顔師古が「疆讀曰疆」と注するのと、一致する。
- (25) 周祖諤「漢字的產生和發展」(『國學集上冊』、中華書局、一九六六年、十一頁)。
- (26) 小川環樹「中國の字書」(『中國の漢字』、中央公論社、一九八一年、二百三十四頁〜六頁)。
- (27) 簡宗梧『漢賦源流與價值之商榷』、文史哲出版社、一九八〇年、七十

九頁に指摘がある。また簡氏はさらに「甘泉賦」の「轆纏」も同音であるとするが、顔師古は「轆の音は森、其の字は巾に從う。纏の音は所宜の反」と注するから、「リンリ」と「シンシ」で、別の音であろう。他にも簡氏は似た音の連綿字を、同一音を故意に書き換えた例としていくつか挙げているが、それらは微妙に異なっているから、むしろ賦の作者がさまざまな雙聲疊韻の語を驅使して、少しずつ異なった音によって細かな違いを表現し、聞き手に状態を細部にわたって認知させようとした表れと考えるべきであろう。

- (28) 注27同書八十五頁参照。
- (29) 『漢書』本傳「時雄校書天祿閣上、治獄使者來、欲收雄、雄恐不能自免、乃從閣上自投下、幾死。莽聞之曰『雄素不與事、何故在此』。問請問其故、乃劉棻嘗從雄學作奇字、雄不知情、有詔勿問」。